

白井吉見『安曇野』論ノート

——物語言説と作者の境位

野中 潤

一、はじめに

十九世紀末から語り起こされる白井吉見の『安曇野』⁽¹⁾は、元号で言えば明治、大正、昭和の三代にわたる日本の遍歴を書きつづつた大河小説である。長野県安曇郡白金村出身の相馬愛蔵と仙台藩士の娘として生まれた相馬（旧姓、星）良の二人を主軸として、多彩な人物が次々に登場し、日本近代のタペストリーを織り成していく。日露戦争、関東大震災、満州事変、二・二六事件、日米開戦、原爆投下、敗戦、東京裁判など、歴史的トピックを背景としたさまざまな人物の生きざま、死にざまが、無手勝流とも言えるような自在な筆遣いで描きだされているのだ。焦点化される人物は次々と入れかわり、作中人物が読む書簡や手記、雑誌の記事、児童の作

文などを含む多様なテキストが虚実をまじえてたびたび引用される。作中人物が直接話法で文学論や政治論を戦わせたかと思うと、作者とも語り手とも作中人物ともつかぬ話者による自由間接話法によつて政治思想や人生哲学が開陳される。そして、さまざまな言説を併呑しながら展開される大河小説は、第五部でついに相馬愛蔵と黒光の死を描くところにとどり着き、主要な作中人物の二人を物語の世界から退場させてしまう。しかも、ついに大団円を迎えたかと思われた長大な大河小説は、「作者」である白井吉見を『安曇野』を掲載している雑誌『展望』の編集長として唐突に登場させ、「僕」という一人称を用いて自らの体験や思索を語らせ始めるのである。作者の「私」がいつのまにか後景に退いて消え去って

しまう横光利一の『紋章』（一九三四年一月〜九月『改造』を逆回しにしたかのような趣向であり、まるで方法的な意識の下に書かれた実験小説のようでもある。初出誌に連載されたものを単行本としてまとめるたびに、巻末に「作者敬白」を付してきたことを考えると、第五部の後半は、きわめて長大な「あとがき」であると考えてもよいのかもしれない。ただし、掟破りともいえる方法で自らの体験を語り始めた臼井吉見のモチーフの内実は、実験やあとがきなどといったレツテルを貼り付けるだけではなく、仔細に検討し、慎重に吟味されてしかるべきである。

本稿では、初出誌と単行本のテキストを比較対照することによって、臼井吉見なる「作者」⁽²⁾がどのような意識のもとに『安曇野』を作り上げているのかということを探ってみたい。それはとりもなおさず、長大なテキストを支える（書かれていること／書かれていないこと）のダイナミズム、あるいは（記憶／忘却）の弁証法を明らかにすることにもつながるはずである。

二、「創作」される日本近代史

まずは、さまざまな言説を併呑しながら展開する『安曇

野』という小説の特質が際立つ、第三部の概要を瞥見してみよう。

『安曇野』第三部は、二人の天皇の死、すなわち明治天皇の崩御から大正天皇の崩御までの、概ね十五年間を背景に描かれている。第一部、第二部と同じように一九〇一（明治34）年に中村屋を創業した相馬愛蔵、良（黒光）の二人を中心に展開していると考えて差し支えないのだが、焦点化される人物が次々に入れかわり、物語言説のありようはきわめて多様である。ただし、作中人物の言説に複数の異なる思想的な立場を振り分けて展開する論争小説的な側面はあるものの、第三部においては、作者のイデオロギーを押し売りするような平板な展開になることは周到に回避されている。作中人物の行動が既知の歴史的な出来事の中に一定のリアリティーを担保しつつ描かれていて、大きな歴史のうねりを感じさせながら、物語の中に読者を巻き込む仕掛けが比較的有効に機能していると言って良いだろう。

たとえば、大逆事件後の閉塞感の中にあって「中村屋サロン」とも称される人的な交流の場に身を置こうとする相馬良は、社会関係資本を蓄積しようとするかのように多くの人々と積極的に関わりを作っていく。早稲田大学の桂井当之助、

片上伸、吉江喬松らを招いて中村屋の二階で開いたロシア語の勉強会もその一つであるし、農業研究から人間探究へと転身して農作物の改良に関する知見を人間改造へと応用しようとして目論んだ岡田虎二郎の「静坐会」への参加もまたしかりである。これらは、「種蒔く人」発行に奔走する佐々木孝丸の借金申込の話や、中村屋二階の土蔵劇場での脚本朗読会の話などを含め、日本近代という時代のただなかにあつて奮闘し苦闘する人間群像を、小説という形式の中に描き出していくための巧妙な仕掛けであると言つてよい。中村屋のヒット商品「純印度式カリーライス」発売の立役者とも言える亡命革命家ラス・ビハリ・ボースや、中村葬の代表作「エロシエンコ氏の像」で知られるウクライナ人のワシリー・エロシエンコなど、外国人の動向もたくみに織り込まれている。『安曇野』第三部の主人公はもはや相馬愛蔵と良ではなく、同時代の歴史の転変とも呼応して、きわめてダイナミックな展開を見せる「中村屋サロン」なのだと言つてもよいのかもしれない。

もちろん、女関係が絶えない相馬愛蔵を尻目に、サロンに関わる男性を「重要な異性の友人」としてまなざす相馬良の心理も興味深い。おおざっぱに言えば、相馬夫妻を中心とす

る恋愛模様だが、『安曇野』物語を駆動する主軸の一つとなっていることもまた否めないのである。保子という妻がありながら神近市子を愛し、さらには辻潤と離婚した伊藤野枝とも関係を持った大杉栄をめぐる「愛憎の四角関係」について、愛蔵と良が言い争いをする場面など、二人が抱える情念を描写した場面として注目に値する。大杉栄や神近市子らの色恋沙汰をどう受けとめるかをめぐつて激しく言い争つた後、第三部の「その十」は次のような描写で結ばれている。

だまつたまま、じつと愛蔵をにらんでいた良の眼に、みるみる涙がたまると、はげしくこぼれ落ちた。

あわてた愛蔵が、とつてつけたように、つづけた。

「エロ君が神近さんを好きだったことはまちがいないが、雨雀さんもエロ君にまけないほど神近さんが好きなんじゃないのかね。お前さんどう思う？」

返事がない。そして、もう一度、良の眼から大粒の涙がほとばしった。

このあと「その十三」で島村抱月と松井須磨子の愛と死が描かれていることも、時代を象徴するスキヤンダルであると

か、文学史的な出来事であるとかということだけではなく、『安曇野』という物語を彩る恋愛模様の一つとして位置づけることが可能である。

もう一つ忘れてはならないことは、「中村屋サロン」をめぐる人間関係の広がりの中に「教育」という要素が含まれていることである。たとえば、「シラカバ教員」と称された箕浦耕作ら、穂高学校の教師たちの姿や、武者小路実篤や柳宗悦の信州の教育界との関わり、『信濃教育』の編集主幹を務めた島木赤彦の動向、三宅雪嶺主宰の雑誌『日本及日本人』の影響下に作られた東西南北会の教師たちの活動など、「教育」という観点でたどるだけでも第三部には数多くの水脈が描き込まれている。中谷勲ら「シラカバ教員」たちによる小学校児童の感想文の朗読場面が、かなりの紙幅を費やして描かれているところなども、第三部において「教育」が前景化されている一例と言えるだろう。こうした水脈は、長野県の「教育」が帝国日本の大陸政策に果たした役割や、臼井吉見が戦争にどのように関わったのかといった問題にもつながっている。『安曇野』全編を貫く主要な伏流水となっている。

ついでに触れておけば、児童による感想文の朗読以外にも、作中人物による「読む」という行為が頻繁に差し挟まれてい

るところに、第三部の特質を見て取ることができる。自殺した山本飼山の日記を木下尚江が読む場面（その三）、幸徳秋水と菅野須賀子の書簡を木下尚江が読む場面（その四）、エスペラント語で書かれたエロシエンコの書簡を秋田雨雀が紹介する場面（その八）など、枚挙にいとまがない。「読む」主体としての作中人物の姿が後景に退いて、「引用」のような形で織り込まれるケースも目立つ。『白樺』や『新しき村』に発表された武者小路実篤の文章の引用（その一六）や、婚約中の両親を殺害して当時の人びとに衝撃を与え、秋田雨雀の「手投弾」のモデルとなった竹内仁の遺書の引用（その二一）、第五回帝展で「老母像」が注目を集めた中村彝の今村繁三宛書簡、安雄がポケットから取り出して両親の相馬夫妻に見せた早稲田学生新聞の「小樽高商の軍事教練問題」（その二三）などがあげられる。特に中村彝、中原悌二郎、柳敬助の書簡だけで構成された「その五」や、謄写版刷りにして配布した中谷勲の日記の抄録だけで構成されている「その一八」など、臼井吉見が小説という形式の自在さを存分に活用していることは、注目に値する。

このような特質を踏まえると、木下尚江が桂井当之助に語った話として書き込まれている、第三部の「その一」の次の

ような記述は、「小説」という形式を使った『安曇野』という著作によって、臼井吉見がいったい何を成し遂げようとしていたのかを如実に語っている一節と見なしてよいのかもしれない。

キリストの生涯で悲壮の最高潮はゲッセマネの半夜の祈祷だ。この夜半、そこにいたのは、キリストと弟子だけだが、キリストは弟子を離れて、独りで祈った。そうになると、この祈りは、何人の耳を通じて福音記者の手に伝えられたか。考証家は嘲って、この偉大な詩を抹殺するにちがいない。けれども、聖書を創作として愛護してきた自分には、キリストは創作中の人物だということが、なんの不思議でもない。仏教の經典にしたって、スケールの大きい創作だ。經典が伝える釈尊も明らかに創作中の人物だ。釈迦やキリストばかりではない、かくいう自分がすでに創作中の人物だ。君の目に映ずる僕は即ち君の創作の僕だ。考証は歴史じゃない。歴史は創作だ。

第三部の終盤では、甘粕事件や朝鮮人虐殺事件など、関東大震災後の社会的な混乱が描かれている。その上で、復興に

よる百貨店の進出によって変貌していく新宿において、中村屋が経営戦略の見直しを迫られ、合理化と多角化を推し進めていくさまが語られていく。関東大震災後の日本社会の不透明感が印象づけられる一方で、復興による都市化の進展という肯定的な側面を描き、中村屋の実権を握った良の「珍しく朗らか」な笑顔によって第三部は結ばれている。日本近代の「歴史」を虚実のあわいに多様な声を響かせる「創作」として成立させようとしているところに、『安曇野』一編の眼目は存すると言えるだろう。

しかしながら、相馬愛蔵と良が生きている第三部の時空において、極めて大きな災厄が経験されているはずであるにもかかわらず、筆の入り方に大きな偏りがあることをここで指摘しておかなければならない。

浅草の方面は火の海で、一晩中、町なかのざわめきは絶えなかった。

翌朝早くから眼がさめてみると、市内から避難してくる群で、通りはいっぱいだった。どの顔も燻ったように黒く、眼ばかりうつろに光っていた。

中村屋の家族も、平河町の住宅の壁が落ちた程度で全員

無事だった。愛蔵は翌日早々来店して、陣頭指揮をやった。こんな時こそ全力をあげて、お得意様に奉仕しなくてはとの方針であった。竈もどうにかつくりつて、応急処置として、奉仕パンと地震饅頭の二種類を作つて原価販売することにきまつた。

一九二三（大正12）年九月一日の関東大震災の折に中村屋がどのような状況であつたのかを描いた第三部「その二二」の一節である。関東大震災においては、数多くの人びとが主として火災によつて亡くなつてゐることは広く知られてゐる。本所陸軍被服廠跡地だけでも四万人とも言われる人びとが避難するために持ち出してゐた家財道具もろともに火炎旋風に襲われ、悲惨な最期を遂げている。炎を逃れようと川や池に飛びこんで命を落とした人びとを含め、おびただし数の遺体が各所に積み上げられていた。行方不明者になつた家族を捜す人びと、怪我を負つた人びとなど、多くの被災者が東京中にあふれてゐたはずである。「どの顔も燻つたように黒く、眼ばかりうつろに光つてゐた」という被災者の描写は、そうした現実を踏まえてのものと言える。しかしこの描写以外には、阿鼻叫喚地獄とも言える大震災の現実に筆が及ぶことは

ない。大震災という非常時にあつて、中村屋がいかに迅速に原料を仕入れ、商品を製造して販売にこぎつけたかということが語られるのみである。新宿、四谷方面では多くの商店が九月十日ぐらゐにならなければ商売を再開できなかつたにもかかわらず、中村屋は「四日には早くも店を開いてゐた」ということが特筆されてもゐる。そして店を開いた晩に、相馬愛蔵が菓子職人や工場関係者を集めて語つたことは、「菓子のいのち」ということだった。「原料の本質を知つてそれを生かすこと、その上に食欲をそそる魅力ともいふべき品位を備えなくてはいけない」というのである。菓子を売る商店の人間として大震災による社会的混乱にいかに対処し、危機を乗り越えて社会的な成功をつかみとつていったのかといふところに焦点が当てられ、震災復興という時代の流れの中でいかに中村屋が社内の機構改革を実施したかについて詳述してゐる。また、「不逞鮮人」の噂が巻き起こした社会的な混乱や、大杉栄と甥の甥橘宗一、伊藤野枝が殺された甘粕事件などについても、比較的多くの筆が費やされてゐる。しかしながら、焼け出された人びとや傷付いた人びとについては、先に引用したような断片的な描写を除き、詳述されることはない。『安曇野』にとつての関東大震災は、あくまでも経済的、

政治的な出来事なのである。第三部の最後の「その二十四」には、震災の「総括」とも言うべき、次のような叙述がおかれている。

震災からすでに四年目を迎えたが、東京の人の動きと暮し向きなど、すべて愛蔵の予想どおりに移ってきた観があった。これからは、山の手線の内側に住む者が少なくなつて、外へ外へとひろがるにちがいない。世界戦争のおかげで伸びてきた各種企業は、古い街の枠が震災で破壊されたために、規模と設備をのびのびと発展させて、大勢の勤人を必要とするようになり、彼らはいずれも住居を郊外に求めるほかないだろう。そうなると、内と外との結び目である新宿の役割はいよいよ重要となるにちがいない、というのが愛蔵の見通しであった。それは愛蔵の予想よりも大規模かつ迅速に、気味の悪いほどの中した。

こうした冷徹な眼差しは、相馬愛蔵のものであるのか、あるいは第一部から第五部まで、単行本が上梓されるたびに「作者敬白」の書き手として巻末に登場する白井吉見のものであるのだろうか。

三、推敲する「作者」

第一部の連載を終えた後、視力に異常を来たし、両眼の手術を余儀なくされていることを考えると、第五部完結時には満六十九歳になった白井吉見が、連載を単行本化するたびに徹底的な加筆修正作業をおこなっていたとは考えにくい。実際、初出誌と単行本を比べてみると、大きく手が加えられているという印象は少なく、推敲箇所もそれほど多くはないところだが、「作者」が文章の彫琢に無頓着かというところ、そういうわけでもなさそうだ。初出と単行本を比較対照したときに浮かび上がってくるのは、読点の打ち方ひとつにも神経を行き届かせ、作中人物の発話の細かいニュアンスにも気を配って推敲を重ねている「作者」の姿である。以下、「作者」としての白井吉見が本編に唐突に登場する第五部に関して、初出⁽³⁾と単行本の異同を検証してみよう。

たとえば、第五部の「その一」の冒頭部に石川三四郎が昭和二十年八月十五日の玉音放送を聞く場面があるが、「時報につづいて、君が代がはじまった。」に読点をつつ挿入し、「時報につづいて、君が代が、はじまった。」と改めている。こうした類の読点の追加は無数にある。また、「甲州には、

めあての富士山があるので。あいつらの通り道になつてゐたいですよ」という新津友蔵の科白の場合、「あるので」「あるんで」と書き換えられている。あるいは、「その二」の石川三四郎の科白では「権力で国を治めるといふことのない社会をつくらなくてはならない」が「権力で国を治めるといふことのない社会をつくらなくちやならない」に改められている。「つくらなくては」を「つくらなくちや」に改めることにどれほどの必要性や必然性があるのかはわからないが、単行本化にあたって、丹念に校正刷を読み直し、「作者」なりのこだわりをもって推敲を重ねていることはわかる。

もちろん、必要性や必然性があると推測できるものもある。とりわけ、イデオロギーがらみの語句や歴史観に関わる語句の書き換えには、「作者」の意識の境位が露わになっていて興味深い。たとえば、第五部の「その二」に「一とたび終戦の大詔が発せられると、軍は一糸乱れず、兵器を捨てて、これに従った」という一文があるが、「終戦の大詔」が「敗戦の大詔」に書き換えられている。ところが「その三」には、「停戦の詔勅」と「終戦の詔勅」という言葉が混在している。「その二〇」で「戦争に敗けて復員してきたころ」や「見当もつかなかつた戦争が終わつた」、「無茶な戦争に敗けて」な

どの「戦争」を「いくさ」と書き改めていながら、「戦争のさなかに、はつきり言い切つた柳田國男だつた」とか「戦争に敗けたいま、のんきすぎるといふなら、それもいたしかたない」などは、「いくさ」に書き換えられず、「戦争」のままである。こうした事例には、必要性や必然性ということよりもむしろ、陸軍少尉として従軍した歴史的な出来事に対する「作者」の意識の揺れが顕在化していると考えられる。

同じく第五部の「その五」では、昭和天皇に対して「このごろの天皇の暮しは、いわゆる耐乏生活で、七分搗きの麦飯を常食としておられ」と書いておきながら、単行本化に際しては「常食であり」として、敬意を消去している。また、東京オリンピック開会式について書いている「その二二」でも、「すでにわれわれが耳馴れている、例のかん高い、調子はずれの声をあげて、開会宣言をされた」という表現を、「すでにわれわれが耳馴れている、例のかん高い、調子はずれの声をあげて、開会宣言をやつた」と書き改めている。「耳馴れている、例のかん高い、調子はずれの声」というところは、明らかに玉音放送で肉声を公表して以降の戦後の昭和天皇像が反映しているが、初出時の「開会宣言をされた」には、戦前の昭和天皇に対する意識の残滓が見て取れる。

単行本化に際して「作者」は、そのような戦前の意識の残滓を抹消していることになる。同様に、「三国同盟の判こを押した天皇に、いまこうして、開会宣言などをお願いするのは、あまりに残酷ではないかと思つた」という表現を、「開会宣言などをやらせるのは、あまりに残酷ではないかということだ」と書き改めているところにも、昭和天皇に対する意識の変位が見てとれる。もちろんこれは、昭和天皇を戦争犯罪人として断罪するというような単純な論理に基づくものではない。取り上げた表現の後には、次のような叙述が続いている。

政府や宮廷役人どもの相も変わらぬ無神経に腹が立つてならなかつた。天皇も天皇だと思つた。天皇を世界のさらしものにすることに我慢がならなかつた。僕は「五勺の酒」の校長にならつて、自分の手をひろげて、テレビ画面の天皇を隠そうとする衝動をおさえかねた。その言葉を借りるならば、「隠そうとした手は僕の人種としてのそれだつた。それは純粹な同胞感覚だつた。どうして隠さずにいられらう。」

同じく「その二二」で「頭山満を先登とする保守勢力」を

「頭山満を先登とする反動勢力」と書き改めていることなどには、明治以来の国家体制を「天皇制ファシズム」と捉え、国家主義的な思想に批判的なまなざしを向ける戦後的な価値観に「作者」の意識が近づけられているさまを見てとることができる。一方「その二三」では、「真崎大將は、日本が不正な対米英戦争をするのをおしとどめようと、最後まで反対した勇氣ある將軍だ」という断定には、もつと多くの論証をかさねてもらわれないことには、俄かに信ずるわけにはいかない。」という文において、「不正な対米英戦争」という表現を「無謀な対米英戦争」に改めている。「不正」を「無謀」と言い換えること自体の中には、東京裁判的な歴史観に留保を加えようとする「作者」の意識が読み取れる。また、解釈のしかたによっては、「俄かに信ずるわけにはいかない」ので「もつと多くの論証」を重ねて信じられるようにすべきだと「作者」が考えているとも解釈できるが、単行本化にあつては「どうてい信ずるわけにはいかない」と書き換えられていて、真崎甚三郎を批判する立場が明確化されている。しかも、直後に次のような一文を加筆している。すなわち、「真崎こそ決定的な瞬間に、青年將校を裏切つた陰謀家であることは、いまや明白な事実と考えるからである。」と書かれて

いるのだ。A級戦犯として逮捕した真崎大将を不起訴処分にした東京裁判に対して批判な立場を示しつつ、二・二六事件における真崎甚三郎の暗躍を糾弾し、一方で敗戦国の指導者に対する評価を「不正」から「無謀」へとずらしていく。このように見てくると、推敲する「作者」の境位に、単純に片付けることのできない揺らぎがあることは明らかである。

第五部「その一〇」において、東京裁判法廷内の座席配置に関する描写を削除する一方で、パール判事に関して語った次のような段落を追加するなど、大幅な加筆修正がほどこされていることにも、自らが関わった歴史的な出来事に対する「作者」の境位の変化が顕在化している。

開廷以来、インドの判事パール博士の法廷における態度には、特異なものがあった。毎回の開廷に当って、総員起立のうちに、裁判官が入廷着席のとき、きまつて端の椅子に着くパール博士はただ一人、被告席に対して頭をさげ、目礼、全被告が丁寧に応答する風景は異様なものを感じさせた。法廷で博士は始終黙々と瞑想にふけるかのようであったが、審理が進んですべての立証が終るころ、帰国して再び来らず、本国から浩翰ウツクな判決意見書を送付、全被告の

無罪釈放を要求した。

四、推敲しない「作者」

加筆訂正されている箇所は、全体としてそれほど多くない印象なのだが、見てきた通り、おざなりの推敲をしていたというのではない。かなり丹念に読み返した上で、修正すべきは修正し、加筆すべきは加筆していることがうかがえる。したがって、手をつけていないところも、入念に読み返していたはずである。その上で、加筆修正の必要を「作者」が認めた場合、加筆修正がほどこされていないということの中にも、「作者」の境位をうかがい知る手がかりを見出すことが可能である。たとえば、「中村屋相馬夫妻の臨終までを書き終えた作者の僕は」という書き出しで始まり、「白井少尉」が登場する「その一七」には、ほとんど推敲がほどこされていない次のような一節がある。

枕もとで、女の泣きごえがして、目がさめた。女中が、いくら声をかけても、僕らが起きないので、枕もとへ坐りこんで泣き出してしまったのだった。けたたましい爆発音

のかたまりが、どつと耳を襲った。雨戸があげ放されてい
て、部屋いっぱい赤いものとびこんできた。火事だナ
と思い、脱ぎ捨ててあつた軍服を着た。どうしたんだ？
これやア、びつくりこいたなア。唐木も起きてきたが、び
つくりしたらしくもなさそうな口ぶりだった。寝ぼけてい
たのかもしれない。

はだしのまま、庭にとび出すと、空一面、真赤に焦げて
いる。幾筋もの探照燈の照射が探しまわっているなかを、
列をつくって泳ぎまわっている銀いろの鮎の群れ——敵機
と知る一瞬さきに、美しいと思つた。ほんとうに美しかつ
た。美しいと思つたことを、くやしく思う気持ちが次にきた。
最後に、とうとう来たナと思つた。B 29の大群のとどろき
と、迎え撃つ高射砲や機関銃らしきものの連続音が耳を襲
するばかりだった。僕は呆然と赤い空を泳ぐ鮎の群れを見
あげていた。

銀色の鮎の泳ぎを目で追いながら、僕は妙なものを思い
浮べていた。妙なもの——正田敏男の詩であつた。

安曇野の穂高に宿営中であつたにもかかわらず、唐木順三
や古田晁に会うために軍律をおかして「無断出京」した

「僕」（臼井少尉）が、酒を飲んで語り明かした挙げ句に
「したたかに酔つて」しまい、唐木とともに大塚窪町の友人
宅に泊まり込み、一九四五（昭和20）年三月十日未明の東京
大空襲を目撃した場面である。この直後には「あゆおよぐ」
という詩が、ていねいに引用紹介されている。十万人以上と
も言われる死者と行方不明者を出した未曾有の惨劇が間近で
起きていながらもかわならず、「旧制松本高校の仲間」の詩を
想起したことについて「僕」は、「ずいぶん希代」「われながら
不思議な思い」「無論一瞬のうちのこと」などと弁明してい
る。しかし、「美しい」とか「くやしい」とかの感慨しか浮
かばなかつた三月十日未明の自分に対する忸怩たる思いとい
うものは、まったく書き留められていない。そして、起き出
してきた唐木の様子について、「びつくりしたらしくもなさ
そうな口ぶりだった」とあるのを、「びつくりしたらしくも
なさそうだった」と書き換えたことと、「探照燈」を「探照
灯」としていること、「照射が」の後に読点を付け加えてい
ること以外に修正や加筆はない。つまり、自分も一歩間違え
ば、業火に焼かれて死んでいたかも知れないという事実への
瞠目や、多くの同胞の命を奪う殺人兵器を銀色の鮎の群れを
「美しい」と感じてしまったことへの羞恥や、同胞を守るべ

き立場にある陸軍少尉でありながら酩酊状態で阿鼻叫喚の惨劇を傍観していることへの罪障感など、あり得べきさまざまの心理的動揺や葛藤の痕跡がまったく見いだせないのである。夜が明けると、被害の状況が少しずつわかってきて、前夜いったん大宮の下宿先に帰っていた古田から「上野駅から眺めたところでは、下町一帯はささぎるものもない焼け野原で、まだ火をあげ、くすぶっている」などの情報を得る。その後、次のような叙述が続く。この部分は、まったく加筆修正がほどこされていない。

東京の半分ぐらいは焼かれたらしいことがわかると、さすがに僕も不安になってきた。部隊にも何か緊急命令が下って、僕の無断脱出がばれて、大さわぎになっているように思えてならなかった。一刻も早く帰隊しなくてはと思い、残留組の健闘を祈って、だから坂をおりていくと、水道橋駅横の道路を、新宿方面へむかって、乞食よりもみずばらしい異様な風態の群がつづいていた。彼らの顔は一樣にくすぶって、眼ばかり光らせ、たいていは足袋はだしだったが、なかには素足もある。口をきく者はなく、無意識に疲れた足を引きずっていた。

「東京の半分ぐらいは焼かれたらしい」ということわかつたにも関わらず、「僕の無断外出がばれて、大さわぎになっている」ということばかりを心配しているかのような「僕」にも驚かされるが、それ以上にそういう「僕」を描写する「作者」の意識のありようにまったく揺らぎが感じられないことには驚愕せざるを得ない。空襲で被害を受けた人びとに関する描写はこれだけにとどめられており、彼らの内面に寄り添う言葉が書き加えられることもなかった。また、「乞食よりもみずばらしい」とか「異様な風態の群」などの表現も、単行本化にあたってまったく修正されなかった。関東大震災の惨状を前に、冷徹な描写を展開していた第三部の「作者」とほとんど同じ境位から言説が紡ぎ出されているのだ。言い換えれば、表現者としてささいな字句の差異にもこだわって丹念に加筆修正をしている「作者」は、行為者としての自らの過去を捉え直すことには無頓着であり、自己批評的な境位に立つことに対しては抑圧的であるとすら言えるのである。

初出誌と単行本を比較した時に浮かび上がってくるこうした特徴の中には、第五部の「その一七」にいたって、何故に「作者の僕」が唐突に登場することになったのか、また臼井

吉見がこれだけの大部の小説を書かねばならなかったのはなぜかという問題を探る鍵があるに違いない。また、『安曇野』完結後に、新たに『獅子座』という長篇小説に挑んだ理由も、こうしたことと無関係ではないはずである。

これらの残された課題について論じるためには、『安曇野』の作者たる臼井吉見の来歴や、『安曇野』という小説を成立させるために参照された数多くのテキスト、さらには『安曇野』連載中の時代状況の変化など、数多くの問題を洗い直す必要があるが、ここはいったん擱筆し、いずれ稿を改めて論じることとする。

註

(1) 臼井吉見『安曇野』全五巻（筑摩書房、一九六五年六月〜七四年五月）。

(2) 山根正博「小説と伝記のあいだ―臼井吉見『安曇野』について考える」『現代文学史研究』第十七集、二〇一二年十二月）が明らかにしているように、座談会などにおける臼井吉見の発言など参照することによって、所謂「作家論」的な回路への接続が可能である。また、どのような資料が参照されていて、どのように引用されているの

かを検証することや、生原稿との比較対象、戦中から戦後にかけての臼井吉見に関する記録や証言との照合など、さまざまな位相から「作者」の問題に焦点を当てることが可能である。それらの「作者」をめぐる問題系のうち、本稿が取りあげるのは、初出誌と単行本との二つのテキストのあいだに浮かび上がるところの「作者」である。

(3) 第五部の初出は『展望』（一九七三年一月〜十二月）。（のなか・じゅん）